



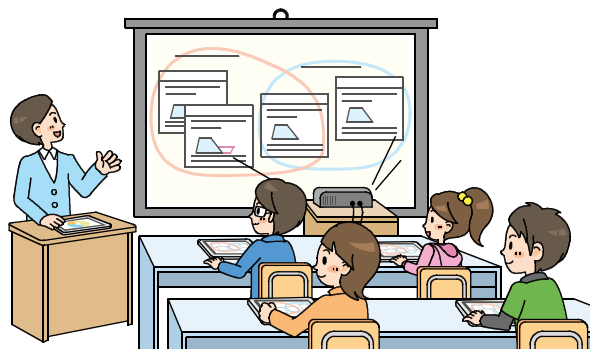
30号では「目は口ほどにものを言う」と書いてきました。目は、ことばで説明するのと同じように、またはそれ以上に相手に気持ちが伝わるものだという。ことばに出さなくても、目の動きや表情で相手に気持ちを伝えることができるのだということ。ことばでうまくごまかしていても目にほんとうの心が表れるということを書いてきました。そして、相手の目を見ずにしゃべる電話のこわさについても書いてきました。もっとこわいのがメールです。メールは相手の目も見えないし声も聞こえません。文字だけで他の情報がまったくありませんから、さらにわかりにくく、誤解を招くものにもなります。



さて、こんどは話を聴くという立場に立って考えてみましょう。話を聞く人にとっては、しゃべっている人の声は何をしても聞こえるし、どこを見ていても聞こえてきます。だから何をしてもよい、どこを見ていてもよいということになりますが、はたしてそれでよいのでしょうか。

じつは「人の話は目で聴く」ものなのです。「目で聴く」とはどういうことなのでしょう。話をしている人の顔を見るということなのです。顔を見なくても声は聞こえますが、話す人の表情、目の動き、動作などの情報を得ることにより、話の内容はより説得力のあるものとなり、また、聞き手にとってはよりわかりやすいものとなるのです。そしてなによりも「目は口ほどにものを言う」というではありませんか。だからこそ、わたしたち教員は毎日の授業をみなさんと対面しながら、みなさんの顔を見ながらすすめているのです。相手の顔を見て話をするのが基本であり、相手の顔を見て話を聴くのが基本だと考えています。

「授業がわからない」・・・よくこんな話を聞きますが、その裏にあるものな何なのでしょう。みなさんは、毎日の学校生活のなかで、人の話をどれだけ集中して聴いているのでしょうか。たとえば授業を受けているとき、集会のとき、「ただ人の声が聞こえてくる」くらいのことしか感じていないのではないのでしょうか。これでは何度しゃべっても同じこと、何度聞いても効果はありません。



「授業がわからない」ということばの裏には、いいかげんにしか聞いていない、集中して聞いていないことによる理解不足があるように思います。「ひと言も聞きもらさないぞ!」というくらいの気持ちで授業に臨んでもらいたいものです。うわつた気持ちをひきしめ、しっかり授業を受けてください。

1時間1時間の授業を大切にすることが、授業理解への近道になるのではないのでしょうか。